

生活科における触覚の活用に関する実践的研究

A Practice about Using Sense of Touch in Living Environment Studies

○福田 義久^A, 野田 敦敬^B

○Yoshihisa FUKUDA^A, Atsunori NODA^B

愛知教育大学4年^A, 愛知教育大学生生活科教育講座^B

Aichi University of Education

本研究は、生活科における触覚の活用について教科書調査及び質問紙調査にて実態を調査した。その結果をふまえ、触覚を活用させる教材の研究を行い、授業実践を行った。

キーワード：生活科，諸感覚，触覚，表現方法

1. 研究の意義

平成20年小学校学習指導要領解説生活編（以下、解説生活編）では、「身近な自然を観察するとは、…（中略）…そこには、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などを使って自然のすばらしさを十分に味わう姿が生まれる。」¹⁾とあるように、五感すべてを活用するように書かれているが、実際は感覚によって使用頻度が異なると考えられる。

安達²⁾、福地³⁾、角谷⁴⁾らは、聴覚、味覚、嗅覚を取りあげているが、触覚を扱った研究はあまり行われていない。しかし、同じく解説生活編では、「児童が体全体で身近な環境に直接働きかける創造的な行為が行われるようにすることを何よりも重視する」⁵⁾とあるように五感すべてを活用する必要があるため、本研究では、触覚を活用させる実践を行うこととした。

2. 教科書調査

調査対象：平成27年度版生活科教科書

調査内容

- (1)教科書の触覚を活用した記載の回数について
- (2)教科書の感触の表現方法の記載について

3. 質問紙調査

日程：平成27年6月～8月

対象：生活科研究会に参加した小学校教員123名

内容：生活科における各諸感覚の活用頻度及び触覚の活用に関する意識調査

4. 教材研究

触覚を活用させるために、触覚以外の諸感覚を遮ることができるよう配慮するため、箱の中

に感触に特徴のある物を入れ、子どもがその箱の中に手を入れて何が入っているのか当てる「はてなボックス」を用いることにした。

5. 授業実践

触覚を活用するトレーニング実践を2種類行った。また、実践後、触覚を活用した活動が行えるようになったかどうかを確かめるため、授業の始めと終わりに「すてきなはっぱ見つけ」を行い、子どもの記録の内容に着目した。

日程：2015年10月20日（火）

時間：2時間完了

対象：名古屋市立H小学校 第2学年28名

単元名：「何が入っているのかな」

「○○□□なもの探し」

※実態調査、教材研究及び授業実践についての調査結果及び考察の報告は、当日配布する資料と発表にて行う。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」, 日本文教出版, 2008, p31
- 2) 安達尚江「生活科における草笛・どんぐり笛の教材化に関する一考察」, 愛知教育大学理科教育領域卒業論文, 2012
- 3) 福地亜由美「生活科における身近な木の実や野草に関する実践的研究」, 愛知教育大学理科教育領域卒業論文, 2013
- 4) 角谷里奈「生活科における嗅覚を活用させる活動に関する調査研究」, 愛知教育大学理科教育領域卒業論文, 2014
- 5) 前掲書1), p10